キャラクター名: 進藤　孔一

プレイヤー名:

シンドローム	モルフェウス / ノイマン	ワークス	暗殺者	カヴァー	
オプショナル		年齢	26	性別	男
覚醒	命令	衝動	嫌悪	初期侵食率	32 %
出自	天涯孤独	経験	危険な仕事	邂逅	ビジネス

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	2	1	1			4
精神	3	0	0			3
社会	2	0	0			2

HP	25
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	1		ＲＣ			交渉		
回避			知覚			意志			調達		
運転：二輪	2		芸術：			知識：レネゲイド	2		情報：裏社会	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ハンドレッドガンズ	射撃	4r+1		5		
ママチャリ	運転	1r+2		2		全力移動 肉体＋40M

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
触媒	
フォーマル　携帯電話	
手袋	
コネ情報屋	
コネ噂好きの友人	
コネ手配師	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
謎の依頼主	P	N		
レギオン（アーチャー）	P	N		
Dロイス:特異点	P	N		
魔銃を携えし孤高の射手（S）	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	34	残り財産P：	0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
ブラックマーケット	3							
効果：	常備化ポイントLV×10							
妨害排除	2	3	オート	視界	単体	自動		
効果：	対象判定前に使用。その判定ではダイス低下を受けない。							
ハンドレッドガンズ	1	3	マイナー	至近	自身	自動		
効果：	武器データ変更							
コンセ[モルフェウス]	2	2	メジャー	至近	単体	自動		
効果：	C値-LV							
ペネトレイト	1	3	メジャー	武器		射撃		
効果：	装甲無視。判定ダイス-1							
戦局判断	2	4	セットアップ	視界	単体	自動		
効果：	対象の行動速度をLV×3する。自分対象外							
プロファイリング	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果：	少しの情報から真実を導き出す。							
万能器具	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果：	日用品を作り出せる。							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

俺は日本一の殺し屋だ。ありとあらゆる殺し方を身につけ、ありとあらゆる殺しをしてきた。幼いころ、物覚えをしたころから俺は殺し屋としての鍛錬をはじめていた。覚えていたのはよくわからない沢山の数字が羅列させた暗号めいた手帳（講座通帳）そして人間との最低限の暮らしのシュミレーション施設で俺は人間の常識を学んだ。（幼稚園）
小学生のころは生き物係という殺しの逆のことを実行する訓練だ。依頼がなければ殺さない。しかし、生かし続けるというのは無理な話だった。そいつの死、俺はそいつに心から依頼をして殺させてほしいと心から願った。だが奴は自らの巨大な壁との戦いにいつも挑戦していた。ただそれだけだ。奴はその目で訴え、俺を残して死んでしまった。その日、俺はたくさん泣いた。依頼がなければ殺さないという困難。そして生かすことの難しさ、生きてその命を全うしたその最後の姿、俺はその日から殺し屋とはなんなのかを再確認する経験を奴は教えてくれた。（カブトムシの世話）
中学生のころ、あれは14の時、最近、殺し屋としてなんだかモヤモヤした病が俺を悩ませ、殺そうとしてくる。依頼者の殺しの方法には可能な限り応えなければならない。なんかこういいネーミングとかかっこいい死に方とかないかなと様々な殺しの方法を今まで編み出した。どれも自分でも思い出したくはない代物だとは思う。（中二病）
俺は今までありとあらゆる殺しの日々を注いできた。そんなある日、それはマガジンを買ってきたその次の日の朝。なんか俺の何かが熱く込み上げてくるような何かを感じる。これを鎮めるにはどうすればいいのか、しかしふと思った。これを鎮めることは依頼をしていないのに殺すことに他ならないのではないのか。その葛藤との戦いの中、隣に買っておいてあるマガジンを心引かれるように見ていた。これを見ると鎮めるどころか逆に促進となって湧き上がってくる。そして、恐怖の大王が見せる光景が俺の目の前に惨状が広がっていた。そうその日、1億～4億匹の大虐殺をしてしまった。俺は心の中が真っ黒に染まっていく感覚に落ちていった。依頼の無き大虐殺、俺は猛烈に死にたくなった。どうすれば俺を殺せる。そして俺はどうすれば償うことができるんだ。その思考の先の光に一つの答えを俺自身の何かが導いてくれた。そして俺は理解した。この罪を償うためには殺し屋として生き続け、その分殺し続けるべきだと教えてくれた。その日から、俺は誰にも負けない日本一の殺し屋になると決めた。（男のサガ）
その3年後、教会でその罪を告白した時、神父さんは告げてくれた。その時、どうやら俺はオーヴァードという力に覚醒していたらしい。
立派な殺し屋として仕事を全うする日々で歳は26才のそんなある日、一つの依頼が舞い込んできた。「これからはじまる大イベントの最中に、6人の人物を殺してもらいたい。殺しの方法は厭わない。そのイベントの参加には君も含まれている。スーパーの超特売セールの挑戦に選ばれたようなものだ。それ相応の用意をしておくことをオススメしよう。次の君の殺しのテクニックが通用するか期待して待っている。　ps　猫をもらい始めて、幾ばくかとてつもなく愛着が湧いてしまったではないか。この報い、ニャンダーランドを建設してモフらねば気がすまん。というわけで子猫を30匹用意してもらいたい。」というないような内容であ